倉持中妻遺跡（略報）

昭和57年3月

茨城県明野町教育委員会

遺跡からみた筑波山

あいさつ

私たちのふるさと，明野町も豊かな自然に恵まれ，古くから先人達の長い間生活の舞台となっておりました。

文化財は，私たちの郷土の歴史や，文化を正しく理解するために，重要な役割を果すものでありますから，後世のためにも大切に永く保存していく義務があります。

今回明野町が実施いたしました倉持遺跡の学術調査に対する期待も大きく，かつ，発掘の進行にともない貴重な遺構，遺物等が数多く確認され大切な資料の発見でありました。

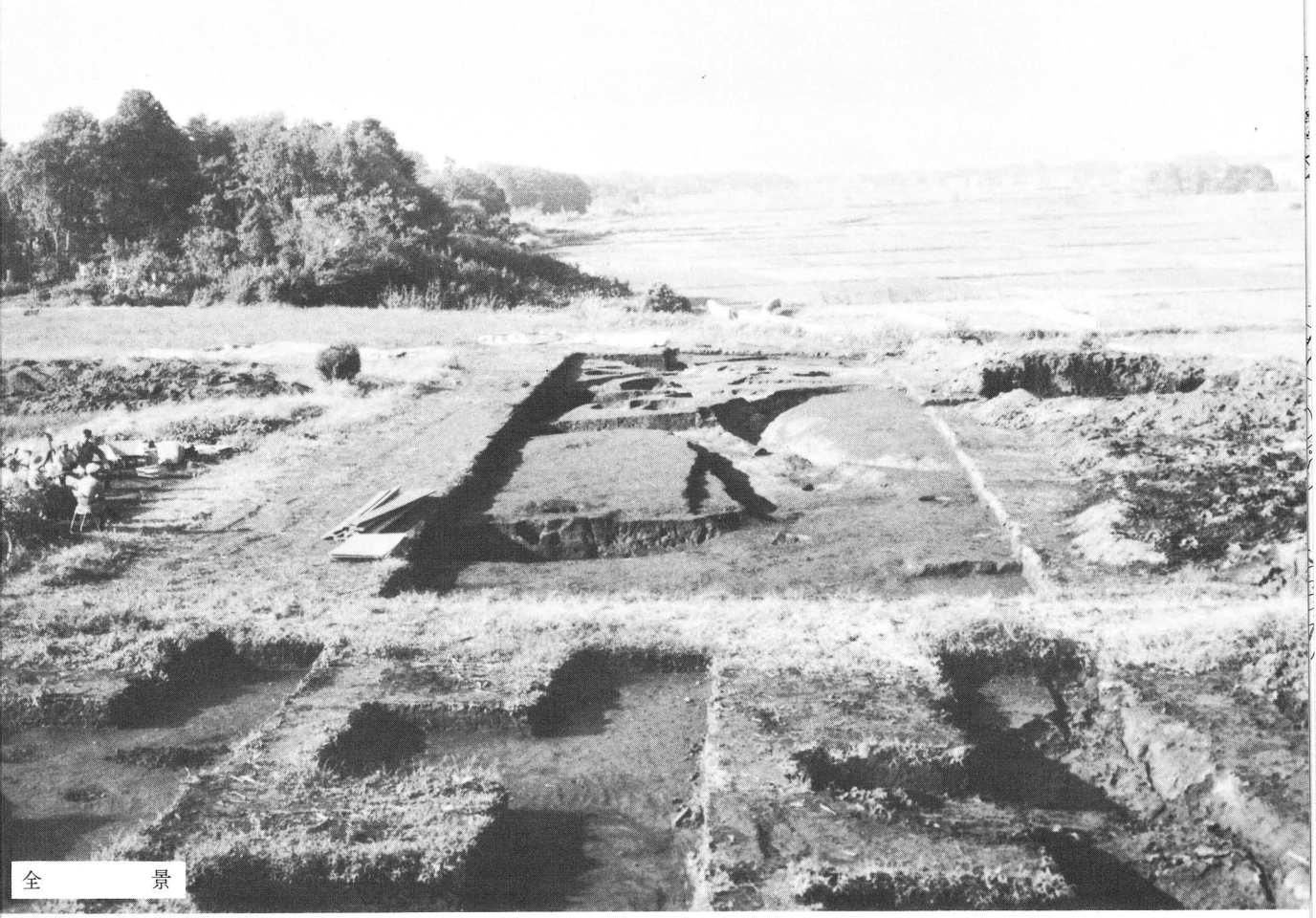
特に，文化財に対する町民の関心が高まりつつある折から，一日も早く調査のあらましを集録し，なおいっそうの理解と認識を深めていただくために，本書を発行し，より多くの方々に御活用いただくことにいたしました。

この調査を契機といたしまして，文化財に対し，今後とも理解と協力をお願いいたします。

本書発行にあたりまして，およせくださった御指導，御協力に対し深く感謝申し上げます。

昭和57年３月

明野町教育長　長　塚　誼　暉



全　　景

1号方形周溝墓

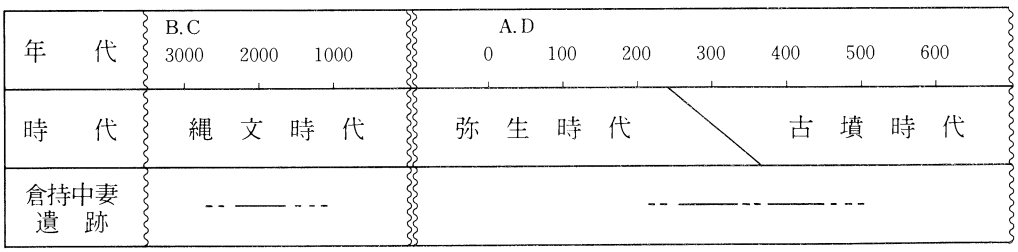
遺跡

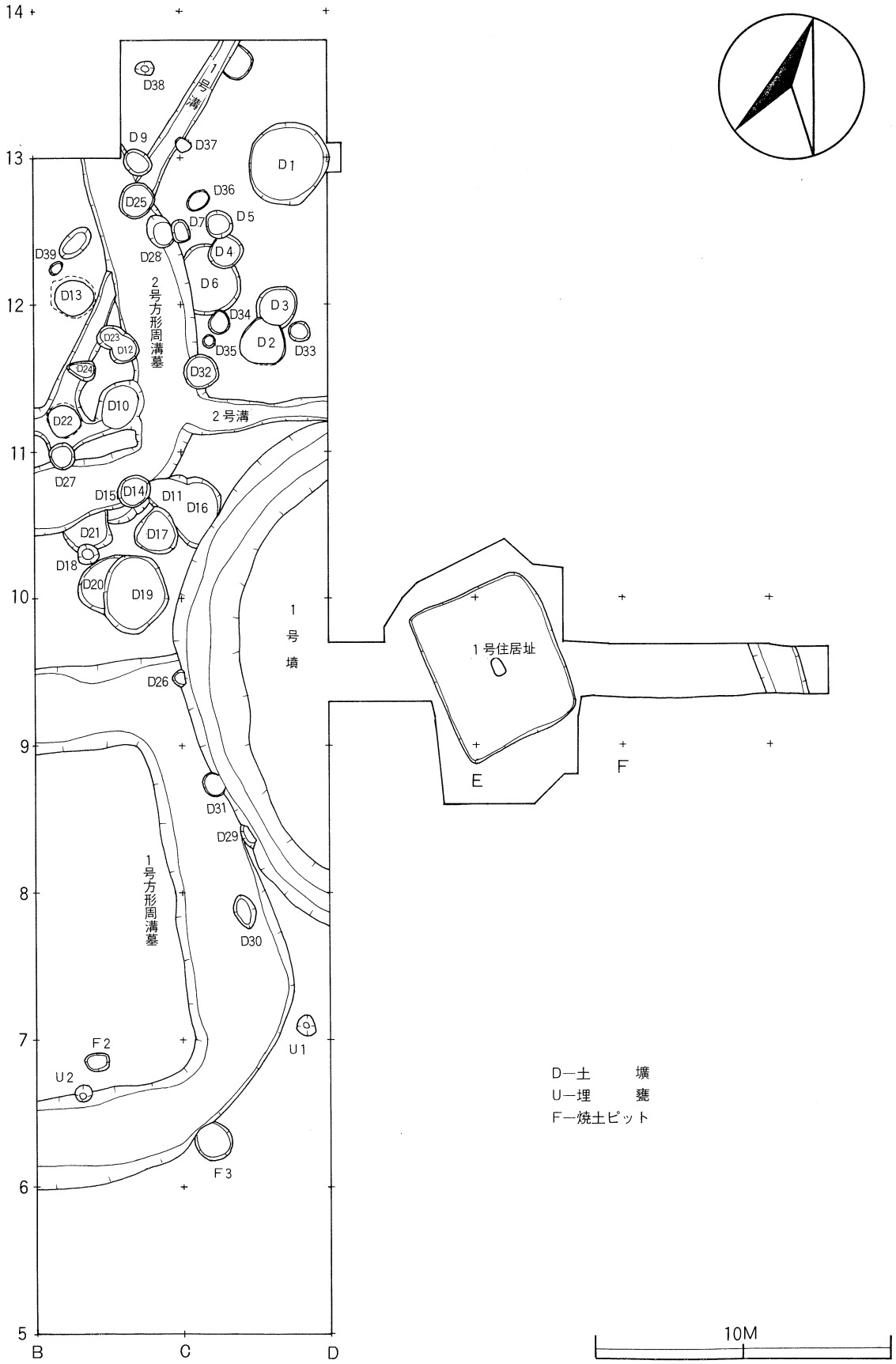
倉持中妻遺跡は，茨城県真壁郡明野町倉持中妻に存し標高35mの台地縁辺部に位置する。台地の東側は水田になっており，水田面との比高差は約８ｍある。遺跡の規模は，台地沿いに約400m，台地の奥へ約150mで，現状は畑地である。遺跡の中央部には，台地下の水田地帯から谷が入り込んでおり，遺跡は，この谷を囲うように形成されている。

調査は，昭和56年７月から10月にかけて行なわれた。まず，遺跡の地形測量をした後，遺跡中央部の谷から北側の約1000㎡の地域に５ｍ×５ｍのグリットを設定して行なわれた。土層は，調査区北部では，表土層・ローム層・黄色粘土層・白色粘土層の順に堆積している。各土層の堆積は薄く，表土下20cmほどでローム面に達し，60cmから80cmで白色粘土層に達する。ほとんどの遺構は，この白色粘土層まで掘り込まれている。調査区の南へ行くにつれて，表土層とローム層の間に，黒色土層・黄褐色土層・暗褐色土層の堆積が厚くなり，谷部では，ローム面まで約３ｍも堆積している。遺物は，この谷部からの出土が最も多く，流れ込んだものと思われる。

遺跡は，縄文時代中期後半から後期前半，弥生時代後期，古墳時代前期にかけての複合遺跡である。調査した遺構は，縄文時代と古墳時代の墓址，弥生時代の住居址である。遺物は，平箱で60個以上出土している。各時期の遺物が出土しているが，縄文時代のものが圧倒的に多い。また，遺構は確認されなかったが，谷部から奈良・平安時代の須恵器の杯形土器が完形で出土した。

今回の調査で特徴的なことは，住居址は弥生時代のもの１軒だけで，縄文時代と古墳時代の遺構はすべて墓址だということである。これらの墓址は，台地の東側に位置するが，墓を造った人々が生活した住居は，台地の奥に，墓に近接してあると考えられる。今後，調査が行なわれれば，よりはっきりした集落構成が明らかにできるであろう。（山野井哲夫）




14
13
12
11
10
9
8
7
6
5
B
C
D
1号溝
2号方形周溝墓
2号溝
1号墳
1号方形周溝墓
1号住居址
E
F
D1
D2
D3
D4
D5
D6
D7
D9
D10
D11
D12
D13
D14
D15
D16
D17
D18
D19
D20
D21
D22
D23
D24
D25
D26
D27
D28
D29
D30
D31
D32
D33
D34
D35
D36
D37
D38
D39
F2
F3
U1
U2
D—土　　壙
U—埋　　甕
F—焼土ピット
10M

遺　構　全　図

縄文時代

縄文時代は，狩猟・漁撈によって人々が生活していた時代である。当遺跡は，縄文時代の中期後半から後期前半にかけての時期で，今から約4000年くらい前のものである。当時は，台地の東側の水田地帯はおそらく沼地になっており，西には森林が広がり，生活するにはかなり適した場所であったと思われる。

今回は，土壙という墓址を39基調査した。これらの土壙のほとんどから骨粉が出土した。土壙とは，円形に掘り込んだ中に，骨を入れた甕を埋葬したものである。規模は，直径が約１ｍ・深さが約80cmのものが多いが，中には，１号土壙のように直径が３ｍ近くもあるものもある。また，４・５・６号土壙のように，深さが20cm足らずのものや，27号土壙のように深さが 1.3ｍ近くもあるものもある。断面形が，口よりも底の方が大きいという袋状の形をした土壙があるが，当遺跡では，はっきりした袋状土壙は13号土壙である。ほとんどの土壙が，底の方がやや小さいか，外側にわずかにふくれたものである。これらの土壙の中で，明らかに土器を棺として使用したと思われるものは，１・13・27号土壙である。２・３号土壙のように，底に大きな石を置いたものもある。

以上の土壙の他に，埋甕という墓址が２基確認された。これは，土壙と異なり，土器がすれすれにはいるぐらいに掘って，土器を埋めたものである。

縄文時代中期後半から後期前半にかけての時期は，全国的に例が少なく，当遺跡の遺構・遺物は，この時期の土器文化の様相を考える上で貴重な資料である。（山野井哲夫）

弥生時代

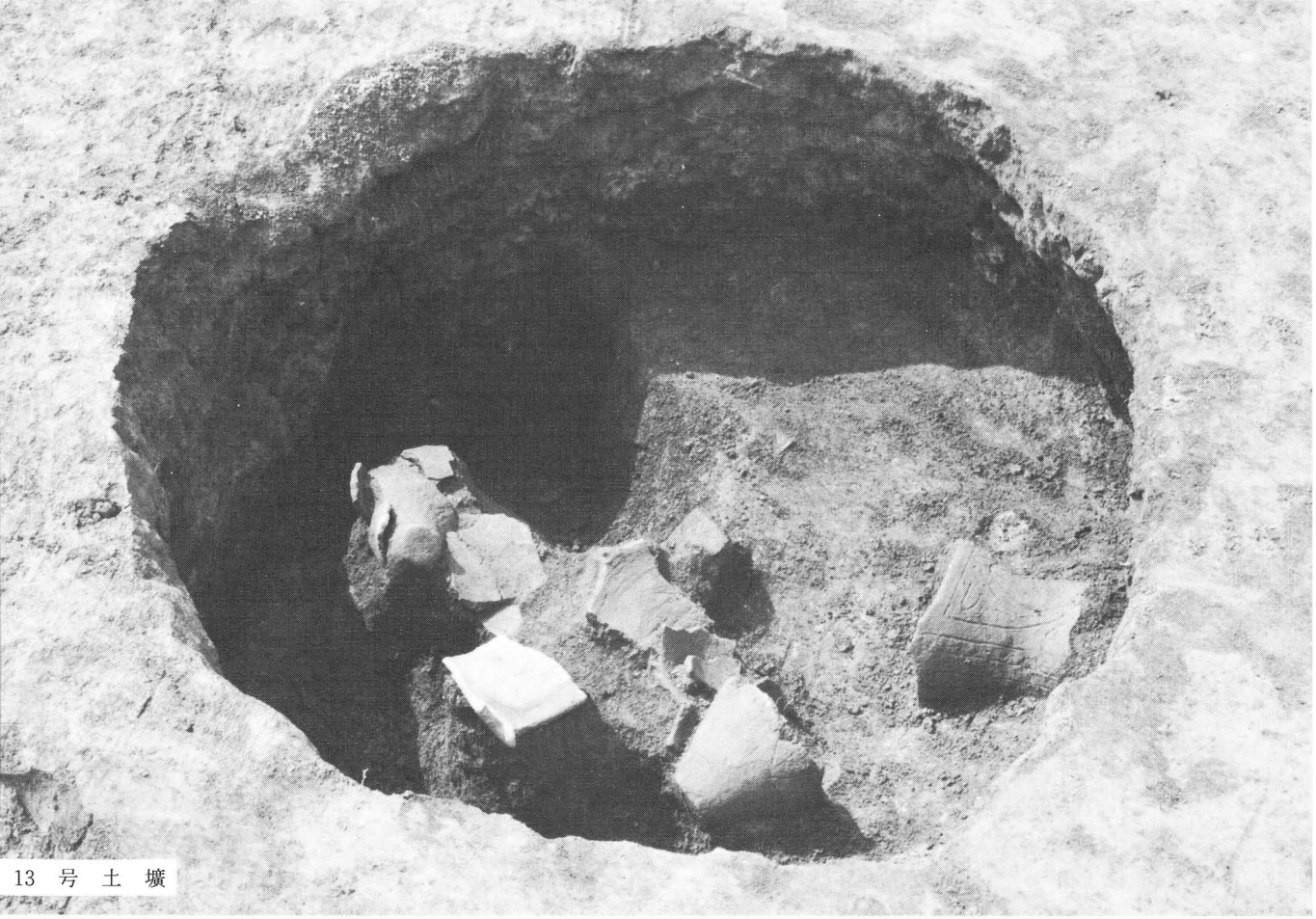
弥生時代は，稲作が始まり，人々が定住生活をするようになる時代である。また，石器の他に金属器も使われるようになる。当遺跡では弥生時代後期，今から約 1,800年くらい前の時期の住居址が１軒だけ確認された。

当時の住居は，地面を掘り込んだ竪穴式住居と呼ばれるものである。規模は，５ｍ×４ｍで長方形を呈する。深さは古墳を造る時に削平されたようで５cmから10cmぐらいである。床面は非常に堅い。住居址のほぼ中央に炉址があり，そのまわりに柱穴が５ケ所確認された。炉址には，赤色の焼土が堆積している。柱穴の直径は15cmから20cmぐらいで，深さは50cmぐらいである。

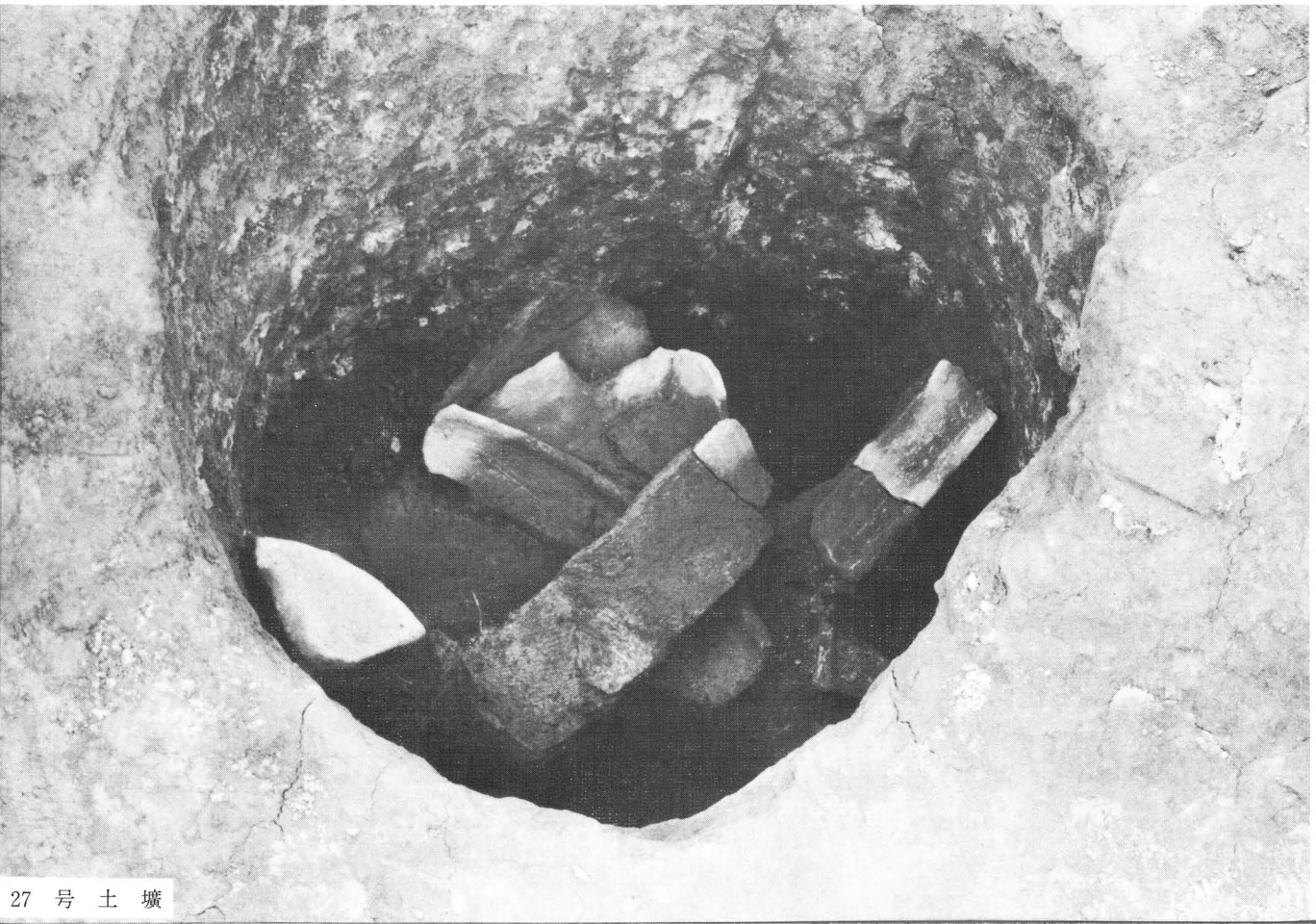
弥生時代後期という時期は，茨城県西部では，不明確な点が多く，当遺跡の資料は，今後の研究に期待できるものである。（山野井哲夫）

1 号 土 壙

2 号 土 壙



13 号 土 壙



27 号 土 壙

1 号 埋 甕

2 号 埋 甕

1号土壙出土遺物

3　号　土　壙

1 号 住 居 址

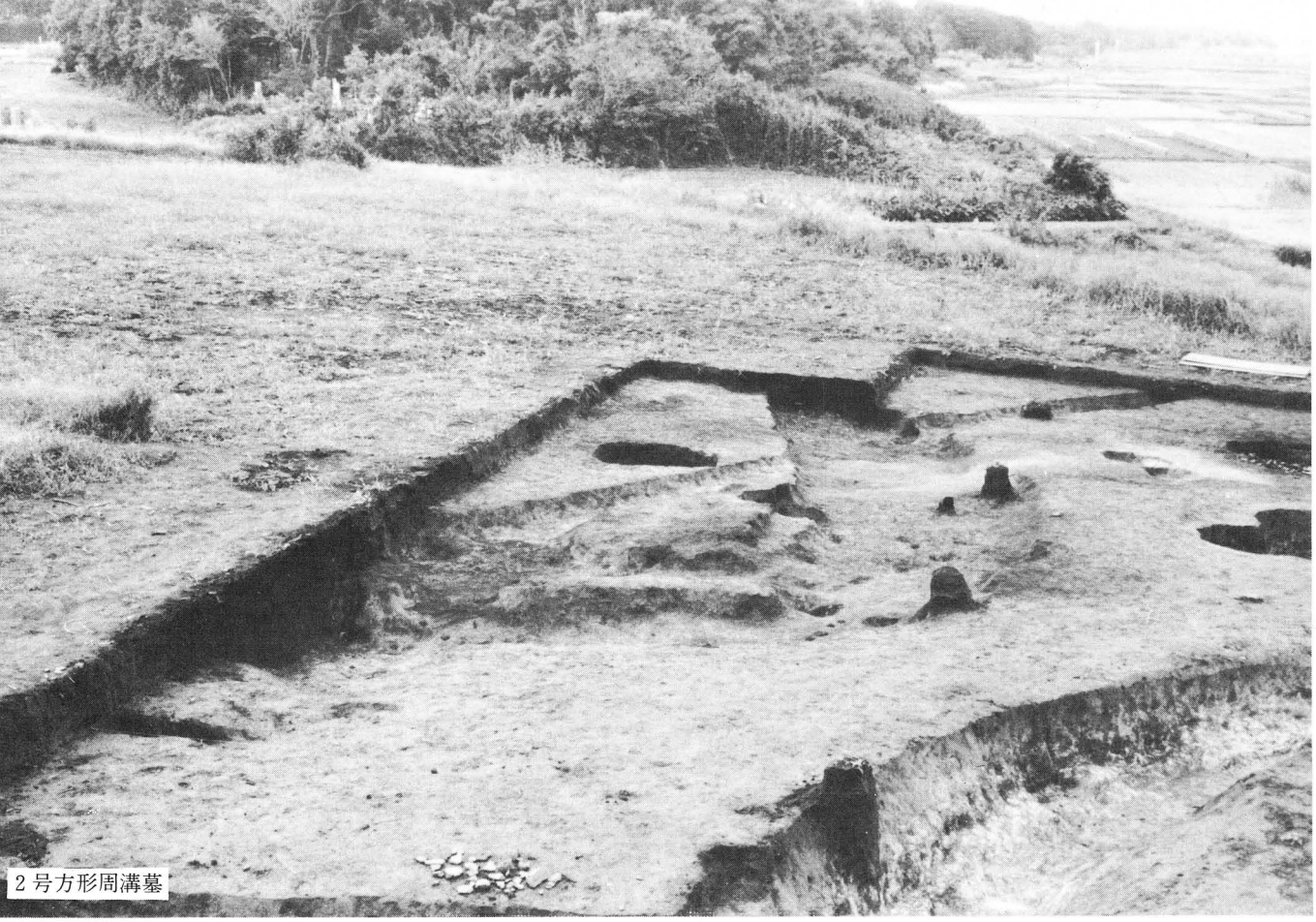
古墳時代

古墳時代は，全国が統一され，各地で豪族の墓，すなわち古墳が造られた時代である。明野町でも，宮山観音古墳・台畑古墳・灯火山古墳などの前方後円墳がある。

当遺跡は，古墳時代前期，今から約1,500年くらい前の方形周溝墓と呼ばれる墓址が２基確認された。方形周溝墓とは，古墳よりも古い墓址で，弥生時代後期から古墳時代初頭にかけて造られた墓である。方形に溝を掘り，その溝で囲った中に埋葬したものである。また，溝の中に埋葬した例もある。規模は１辺が約15m で，大型のものである。溝の幅は２m から３m ぐらいで，深さは20cmから50cmぐらいである。今回の調査では，埋葬した跡は確認できなかったが，溝中から墓に供えたと思われる土器が出土した。１号方形周溝墓からは，土師器の器台形土器が出土している。器台とは，その上に土器をのせて使用したものである。２号方形周溝墓からは，底を欠いた土師器の壺形土器が出土した。

以上の方形周溝墓の他に，直径が約20cmの円形に巡る溝を確認した。これは，おそらく古墳の周溝ではないかと思われる。溝の幅は 1.5m から２m で，深さは約80cmである。出土遺物は，鉄製の刀子・土師器の椀形土器などがある。刀子とは，今のナイフのようなものである。

今回調査した方形周溝墓は，茨城県では，数遺跡で調査されただけで，県西部では初めて確認されたものである。（山野井哲夫）



2号方形周溝墓

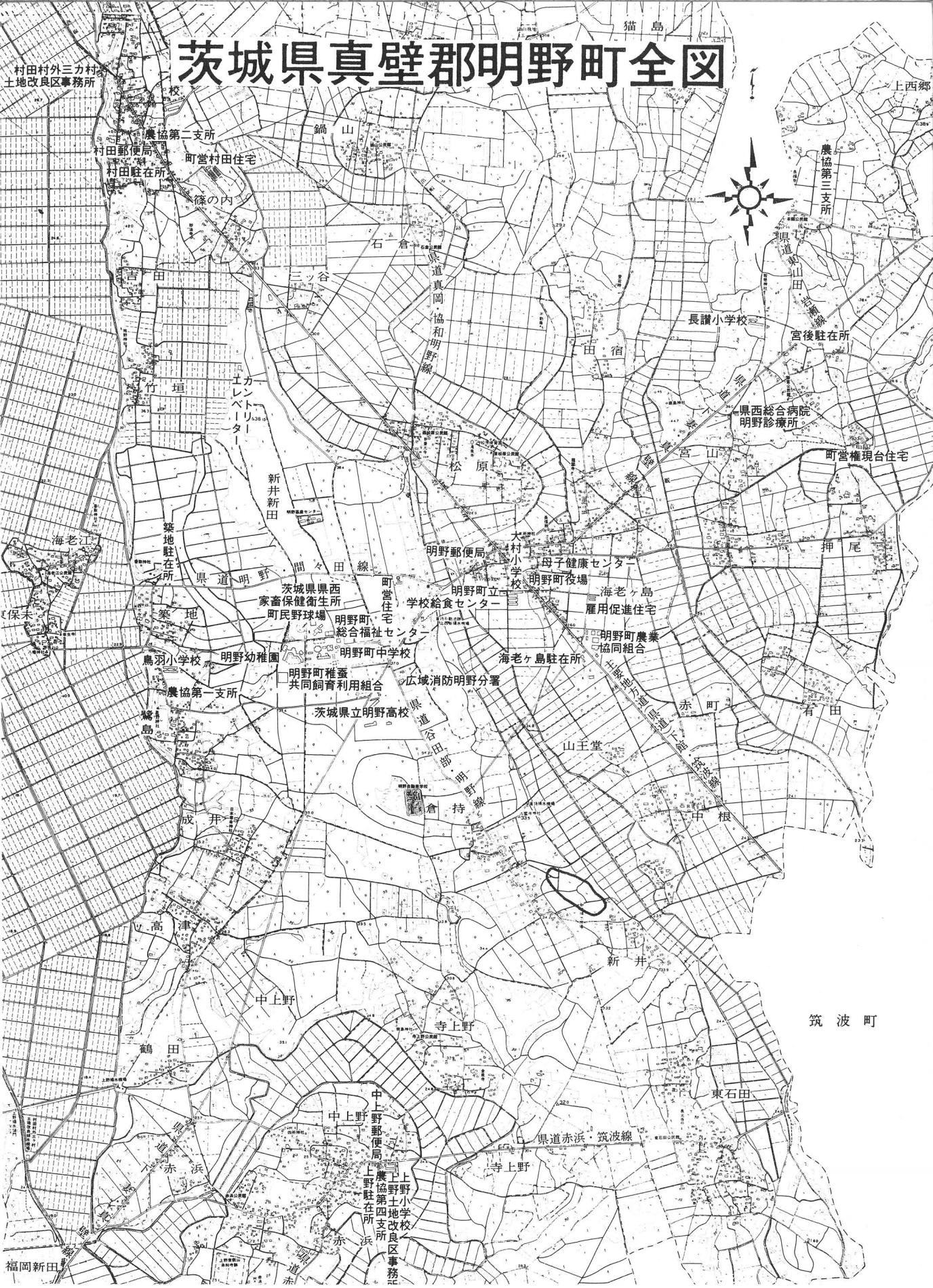
1　号　墳

1 号方形周溝墓出土遺物

2 号方形周溝墓出土遺物

遺跡全景

茨城県真壁郡明野町全図



倉持中妻（くらもちなかつま）遺跡（略報）

発行年月日　昭和57年3月31日
編集兼発行　茨城県真壁郡
　　明野町教育委員会
印刷所　有限会社　綿引プリント社
　　水戸市城東1丁目5－21